

## 秩 父 巡 検

( 9 月 6 日 ～ 9 日 )

夏体みの遊び疲れかなにかがちよっとみえる皆の顔が、西部秩父駅に集まった。台風がきていて、だいぶ空模様が心配されたが、その台風は前夜のうちに銚子の沖に逃げてしまった。

さていよいよ巡検である。指導して下さったのは、斎藤先生と1年次に続いて2回目の浅海先正で、総合テーマは、「地形面と土地利用」。荒川に沿って、寄居扇状地、秩父盆地の河岸段丘、さらに上流の大滝村栃本部落の三カ所に特に焦点をあて、荒川によって形成された特徴ある地形面上には、どのような土地利用がなされているかを調査しようというわけである。宿舎を、西部秩父駅近くにとり、下流から上流へ向けて、マイクロバスと車を使った巡検であった。

まず宿舎に荷物をおくと、さっそく一番近い、中位段丘面の露頭を観察。秩父市と寄居町の間にある長瀬では自然博物館と、すぐ近くを流れる荒川の河床での観察。長瀬系と呼ばれる結晶片岩などの岩石や、秩父盆地の形成史など中心にみてまわった。河原でお弁当を食べた後、寄居へと向った。

寄居では、まず鉢形城跡を見学。かつての堀跡は現在は水田や林業試験場となっているのが興味深かった。

さて、マイクロバスは、寄居の扇状地に入った。はじめ、扇頂から荒川に沿って南縁を扇端付近まで行き、そこで折れて扇央を通り北に向かい、また折れて扇頂にもどるというルートをとった。だいたい扇状地をぐるっと一回りしたことになる。途中、この巡検の焦点の一つである櫛引の開拓農村で、土地利用の調査を行なった。4年生1人を含めた16人が2つつ8グループに分かれ、きっちり区画整理された開拓農村を1区画ずつ歩き、土地利用を調査した。わからない作物は斎藤先生にお聞きした。又、畑のすみにころがっていたスイカは、夏にスイカを栽培していたことを示しているから、すみまでよく観察することも教えていただいた。3年生にとってはこれが、自分で歩き、目で観て考察する初めての体験である。思ったよりむずかしい。観察したものをすぐにメモすることの大切さを知った。

さて2日目は、秩父盆地の荒川左岸の段丘面の観察である。前日の開拓農村同様8つのグループが別々のルートで荒川左岸にある尾田蒔丘陵を上り、市街地である下位段丘面から、丘陵頂上の上位段丘面に至るまでの地形の変化、土地利用の変化を観察した。市街地のある段丘面を一步過ぎて上りはじめると、もう山村である。桑畑とそば畑が多く、山際まで開かれている。中腹にいくつか部落があった。丘陵の頂上は上位段丘面で平担、とは言っても雑木林では何も見えない。しかし、丘陵の北縁付近で大きなローム層の露頭を見た時には、うれしくなってしまった。この日は、丸1日歩いた。

さて3日目は、秩父市内にある三菱セメント工場を見学した後、約1時間マイクロバスでのドライブをして大滝村栃本へ向った。

三菱セメント工場では、ヘルメットをかぶって工場内を見学したが、予想よりもさらに働く人が少ないのに驚いた。又、セメント工場のバサバサしたイメージは、まったくのまちがいであることを知った。もっと、いろいろ知らなくてはいけないのだ。

さて、栃本は荒川の最上流部の部落である。ここに登山口がある十文字峠を越えると長野県だ。長野市出身の私は、川に沿って上流をにらみ、“川上村は、あの山の向こうだ。”と思うと、何んとはなしに、にやりとした。

大滝村も、過疎の村である。最近はやりの民宿に手を出して、観光の村で再建をはかろうというのが村役場でのお話であった。しかし東西に走る峡谷で空は狭く、面積も狭い、20度近くもある傾斜地の農業は、見ただけでも、楽ではないことがわかる。ここでもグループ別に土地利用調査を行った。

好天に恵まれ、スムーズな日程で3日間が終わり、4日目は、荒川河床で断層を観察し午前中に解散になった。

今回の巡検は3ヵ所でのグループ別調査を中心に荒川沿岸のさまざまな土地利用、生活をみた。さらに個人別に15人が、15の視点から荒川沿岸を研究し、それをまとめている。15人の協力で、どんなものができるだろうか。

(浅海先生・斎藤先生指導 3年 小林 世子)

## 会津・郡山巡検(10月3日～6日)

10月3日14時30分、ジープにセーター、肩にはリュックサックと、おなじみのスタイルで会津若松駅に集合。いよいよ2度目の巡検のはじまりだ。さっそく市内の漆器工場を見学。現在では、漆器製造は、完全分業によって行なわれており、その全部を、産地問屋がとりしきっているとのことであった。後継者養成学校を建設したり、そこでは、伝統産業保存の為、さまざまな努力がなされていた。丹念な蒔絵の工程を見学して、漆器製造は工業である以前に、芸術であることを心から感じた。

4日の午前中、漆器工業団地で漆器の製造過程を見学した。ここには土産物コーナーがあり、ブローチ・ペンダント類がみんなの人気を集めていた。その後市役所で、主に漆器産業に関する質問を行なったが、ここでの話し合いで、会津若松市の産業は漆器工業を抜きには語れないことを、十分に理解した。左に磐梯山、右に猪苗代湖をみながら、汽車の中で昼食をとった後、東京電力の丸守水力発電所を見学。この丸守発電所をはじめ、猪苗代湖の水を利用して東京電力だけでも4水系15の発電所があるのだそう。その日の夜は、郡山市の老人センターにとまった。私達は市民宿舎と聞かされていたので、老人センターとわかった時には、いささかびっくりしてしまったが、今考えてみるに、もっと老人達と言葉を交して、老人の目にうつるその土地の様子、変遷等を、聞き取れたら、ずいぶんとよかったのかもしれない。

5日は、郡山市役所を訪れ、市の歴史、新産業都市指定要因、施政方針、安積疎水等、さまざまな事柄について、詳しい説明をおうかがいすることができ、みんなの質問にも熱がはいっている。職員の方のお話から、新興都市郡山をますます発展させる為、市民が一体となって開発をすすめている様子がよくわかった。伝統産業である漆器産業にほとんどを依存し、歴史を思わせずにはいられない会津若松市に比べ、郡山市のなんと漸新なことか。なんとなくイギリスとアメリカを連想させた。午後は、安